

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：32670
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520382
 研究課題名（和文）白朗研究
 研究課題名（英文）A Study of BAI-LANG

研究代表者

平石 淑子 (HIRAISHI YOSHIKO)
 日本女子大学・文学部・教授
 研究者番号：90307132

研究成果の概要（和文）：従来研究成果のほとんどなかった中国東北地方出身の女性作家白朗の文学活動について、作品及び資料等に基づき研究を進めた。近年中国で刊行された新しい資料や作品集にマイクロフィルム収録の当時の報刊資料を加えて研究を進め、初期及び中期の活動に関してはかなりの程度明らかにできた。ただ民国成立後に関しては資料が少なく、特に反右派闘争や文革中に受けた批判などについては今後も調査、研究を継続していく予定である。

研究成果の概要（英文）：Study on the activities of Northeast-China based woman novelist Bai-Lang is made through her works and related materials; her activities have rarely been studied in advance. Newly published articles and works in China and microfilms of various records of her days help to reveal her early and medium-term activities. Research will be continued since materials, especially criticism during the period of Cultural Revolution and Anti-Rightist Struggle, lack after the establishment of the Republic of China.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：中国近現代文学 東北作家 女性作家 抗日文学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当時の背景として以下の三点にまとめることができる。

(1) 社会的背景

近年、日中共にいわゆる「満洲国」時代の文学活動に関する研究が盛んに行われるようになったが、その一方で「東北流亡作家」と呼ばれる、「満洲国」を脱出して本土で文

学活動を行った人々に対する関心が薄れつつあるという背景があった。「東北流亡作家」は本土の人々に対し、侵略された東北の現状を知らしめるという重要な役割を担っており、その後の抗日文学の形成にも大きな役割を担っていたと考えられる。彼ら自身の文学を抗日文学と捉えるか否かに関しては意見が分かれるが、中国近現代文学の枠組みの中

で彼らの役割を明らかにすることは重要だと考えた。

(2) 個人的背景

筆者はこれまで「東北作家」の代表の一人と目されている女性作家蕭紅を中心に研究を進めてきたが、蕭紅の文学活動を客観的に評価するためにも、同時期に活動し、蕭紅とも親しかった白朗について知る必要を感じたことが第一の理由である。更に(1)で述べたように、「東北流亡作家」たちの文学活動を中国近現代文学の中でどう捉えていくかということは、筆者自身の近年における大きな課題の一つであった。

(3) 資料的背景

白朗自身、及び「東北流亡作家」の周辺にいた人々について、最近いくつかの新しい資料が中国で発表、刊行されたことにより、白朗だけでなく、当時の文学状況に関して、新たな情報もたらされた。これらの資料を互いに付き合わせ、検討することで、当時の状況を立体的に捉えることが可能となった。

2. 研究の目的

申請時当初の目的は以下の三点である。

(1) 白朗の研究を通じて中国近現代における党(中国共産党)と文芸との関係を考察する。

(2) 白朗の研究を一つの手がかりとして、中国近現代文学において「東北流亡作家」が果たした役割を考察する。

(3) 白朗の研究を通じて中国近現代における女性の自立について考察する。

3. 研究の方法

研究方法としては以下の三点にまとめることができる。

(1) 白朗に関する資料の整理

①作品整理：白朗の個々の作品について、発表年月日、発表刊行物名などのデータを整理した。また作品集などに関しても、刊行年月日、収録作品などについて、整理し、白朗の文学活動全体を明らかにできるようにした。

②生平資料整理：白朗自身の文章、及び彼女の周辺にいた人物に関する資料や回想録などに基づき、白朗の生涯について把握できるようにした。

③当時の文学状況に関する資料整理：②と平行して、白朗の周辺にいた人物、特に哈爾濱の共産党地下活動に関わった人々の行動について整理し、当時の社会状況と、それが白朗に与えた影響について把握できるようにした。

(2) 作品に関する検討、考察

白朗の作品を①前期(創作活動開始～東北脱出前後)、②中期(抗日戦争期)、③後期(民国政立以後)の三期に分け、考察を進めた。

①前期に関しては、マイクロフィルム資料な

ども合わせ、作品分析を行った。白朗自身の文学的成長ももちろんだが、彼女が夫羅烽の共産党地下活動を援助する中で自身の思想を形作っていった過程、及び当時数少ない女性作家として彼女がどのような文学的テーマを選択したのか、といった点について注目した。

②中期は作家戦地訪問団への参加を中心に分析を行った。作家戦地訪問団については、白朗自身が詳細な記録(日記)を残している他、訪問団に参加した団員が記録した公的、私的記録が残っており、その中から白朗自身の個性、特性を浮かび上がらせることが可能であると考えた為である。

③後期に関しては、前期「研究成果の概要」にも記したとおり、資料そのものが非常に少ない。白朗自身が何度か批判を受けており、その結果として筆を折ったということも関係があるだろう。ただ、白朗の娘を中心に、批判を受けた状況などに関して多少しづつ検証が行われるようになっており、今後新たな事実が判明する可能性もないわけではない。

(3) 白朗を取り巻く社会状況、歴史的状況に関する考察

上記(1)、(2)を遂行する過程で、必然的に行われるべき考察である。

4. 研究成果

上記「2. 研究の目的」の記述に即して報告する。

(1) 中国近現代における中国共産党と文芸との関係について

①近年中国で発表、刊行された文集、回想録、更にマイクロフィルム資料などにより、特に満洲国成立前後の中国東北哈爾濱における中国共産党の地下活動について、より詳しく知ることができた。その成果は2011年3月の国際日本文化研究センターシンポジウムにおいて、「1930年代哈爾濱における左翼文芸活動について—金劍嘯を中心に」(平石)と題して口頭発表を行い、現在それに基づいて論文を作成中である。また論文『大同報・夜哨』と東北作家—李文光「路」を中心に」(平石)もこの研究の成果の一つである。

②既に述べたように、党との関係の中で白朗がどのような意識を持ち、どのような活動を展開していったかということについても関心を持って考察を進めた。その成果の一つとして、白朗の初期の活動について考察した論文「白朗の初期作品について—出て行く若者たち」(平石)がある。ここでは、白朗の初期作品に、従来の、いわゆる中国伝統社会における人間関係を断って、新たな歩みを始める若者たちの姿が顕著に描かれていることに注目し、それを党という思想的背景を得て、自立への道を歩もうとする白朗自身の姿の

反映と捉えた。

(2) 中国近現代文学における「東北流亡作家」の役割について

既に述べたように、「東北流亡作家」は本土において人々の東北に対する注意を喚起し、後の抗日文学を牽引する重要な役割を果たしたといえるが、その代表的作家と目されている蕭紅について、筆者は多くの論考の中で蕭紅を「抗日作家」という「狭い」枠組みの中で捉えようとする中国における一般的な文学史上の意見に異議を唱えてきた。しかし東北脱出以前に既に黨員として活動していた羅烽、舒群、更にそのシンパとして活動を支えてきた白朗（民国成立後に入党）に関して見ると、党の方針に常に忠実であろうとした様子が浮かび上がり、彼らを党の方針としての「抗日」に寄与しようとした作家として評価する必要性を感じるようになった。彼らの抗日の創作に対し、筆者は魅力を感じることは出来ないが、しかしそれが党の方針に従い筆によって戦う一つの試みであったとするならば、彼の文学ではなく、彼らの存在自体を「抗日作家」と呼ぶことに間違いはないように思われる。この問題は即ち政治と文学、社会と文学、歴史と文学という大きな問題につながるものであり、特に創作そのもの（作品だけでなく創作活動を含めて）が大きな制限を受ける（と思われる）共産圏においては今後考えなければならない問題であり、またそれは創作に対して（ある程度の）自由が認められている（と思われる）非共産圏における活動を再考する基盤ともなると考えるに到っている。

(3) 中国近現代における女性の自立について

筆者は特に「東北作家」に数えられる女性たち、或いはその周辺で彼女たちを支えた女性たちの文化的背景に強い関心を抱いているが、中国近現代の女性に関する研究は南方が中心で、先行研究もほとんどなく、また資料も非常に少ない現状がある。この課題については今後継続して追求していく必要性を感じているが、今回の研究活動の中で、1920年代から30年代にかけて瀋陽で発行されていた《東三省民報》のマイクロフィルムを見ることができたことは大きな収穫であった。《東三省民報》に関しては研究成果の一部を小論にまとめ発表予定であるが、ここでは白朗や蕭紅が家庭を持つちょうどその前後に家庭や家庭における夫婦のあり方、また結婚観などに関して盛んな論議が行われている。それを詳しく見ていくことで、当時の東北で女性がどのような生活をしていたのか、その一端を垣間見ることができる。

残念なことに《東三省民報》には欠落が多く、連載される文章も完全な形で読むことが難しいが、今後東北で発行された他の報刊資

料（例えば《大同報》や《盛京時報》など）を調査していくことで東北における女性の生活のある程度立体的につかむことができるのではないか。今回の研究ではその端緒をつかむことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[雑誌論文]（計11件）

(1) 平石淑子「《東三省民報》副刊《家庭》について」

『宇高良哲先生古希記念論文集』、査読無、2012年刊行予定

(2) 平石淑子「『大同報・夜哨』と東北作家—李文光「路」を中心に」

『お茶の水女子大学中国文学会報』第30号、査読有、2011年4月、99～114頁

(3) 平石淑子「作家戦地訪問団について」

『鴨台史学』第11号（大正大学史学会）査読無、2011年3月、77～98頁

(4) 平石淑子「白朗の初期作品について—出て行く若者たち」

『立命館文学』（立命館大学人文学会）、査読無、2010年3月、102～116頁

[学会発表]（計4件）

(1) 平石淑子（コメンテーター）

国際日本文化研究センターシンポジウム「“外地”文学の言説的ネットワーク：台湾と慣習の対話」2012年1月21日、国際日本文化研究センター

(2) 平石淑子「蕭軍・蕭紅と大連」

[満洲国]文学研究会第21回定例会特別企画：植民地都市を掘り起こす～大連をめぐる記憶学、2011年12月17日、日本女子大学

(3) 平石淑子「1930年代哈爾濱における左翼文芸活動について—金劍嘯を中心に」

国際日本文化研究センター国際シンポジウム「中国東北部（旧満州）と日本—100年関係史の整理と再編」2011年3月5日、国際日本文化研究センター

(4) 平石淑子「東北作家群の研究状況について」

「満洲国」文学研究会シンポジウム「中国東北淪陥区・『満洲国』の文学をめぐる研究のいま」2010年3月13日、明治学院大学

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平石 淑子 (HIRAISHI YOSHIKO)

日本女子大学・教授

研究者番号：90307132

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし